

「月の手紙」

宮城県仙台二華中学校 二年 中川 辰樹

僕は兄からの最後の手紙を読んでいた。

「月がきれいなときは、必ず見てろよ。俺もどっかで見てるから。」

手紙に並ぶやわらかい文字は、もう三年も前のものだった。折り目は薄くすり切れて、ところどころインクがにじんでいる。何度も開いて、読んだ。だけど、今でも読むたびに胸の奥が締めつけられる。

兄がこの世を去って三年たつ。時がたてばたつほど記憶が淡くなっていく。兄と過ごした思い出もぼやけていく。

だけど、月だけは変わらない。まるで全てから解き放たれた存在のように、夜空に浮かび続ける。兄は月が好きだった。休日になると決まって近くの丘で夜空を眺めていた。病気で歩けなくなってからは僕が車いすを押して、兄と一緒に行くようになった。兄が亡くなる数日前、僕は兄になぜ月が好きなのかをたずねた。兄はこう言った。

「太陽はまぶしすぎて、誰かを照らすためのものって感じがするんだ。月も光ってるけど、決して自分からは光らない。ただ静かに、大きく変わることなく、ずっと夜空に浮かんでいるんだ。そういうところが好きだ。」

今思えば、あれは決意だったのかもしれない。病に屈せずにもっと長く生きて夜空を見上げたい。そういう願いがこもっていたのだろう。

「詩人になりたいんだ。」

突然、兄が言った。

「誰かの心にずっと残るような、そんな詩を書きたい。叶うと思うか。」

僕は答えた。

「きつと叶うよ。」

本気だった。コンクールで賞をとった詩もいくつかあった。もしかしたら、このまま病も治って夢を叶えられるかもしれない、とさえ思えた。

でも、それは叶わなかった。兄の身体をむしろばんでいた病はゆっくりと、けれど確実に夢も時間も奪っていった。病室の窓から見えた月は、小さくて、遠くて、触れら

れなかった。

兄が亡くなる日、兄は病室の窓から月を眺めていた。そのとき、兄は何かを言おうとした。だけど、口や舌が上手に動かなくて話せなかった。それでも、兄はふるえる手で紙に何かを書き、僕に渡した。

兄が旅立った夜、空には雲一つなく、そこに満月が浮かんでいた。何も語らず、ただそこに浮かんでいた。

それ以来、月を見るたびに僕は話しかけるようになった。もちろん誰にも聞かれないように小さな声で。うまくいかなかった日も、うれしいことがあった日も月につぶやいてみる。そうするだけで、心が軽くなった気がした。

そして今夜も、僕は空を見上げている。手にはあの手紙がある。月はまるで僕を待っていたかのように静かに輝いている。風が吹いた。兄の声が聞こえた気がした。

「見てるよ。ちゃんと、ずっと。」

僕は微笑んで、月に向かって、そつと言葉を返す。

「僕も見てるよ。これから、ずっと。」